

# 大学における映像制作実習と メディア・リテラシー教育の実践 ～人間活性化プロジェクト「発見！駿大いるプロ情報局」活動報告～

間 島 貞 幸

**【要旨】** 本研究は、メディア・リテラシー教育としての映像制作の教育的価値を検討するものである。先行事例として、中央大学 松野良一FLP ジャーナリズムプログラムゼミの学生がプロデュースし、市民が出演しているCATV番組「多摩探検隊」（2004年5月放送開始）における実践研究がある。この春、地域貢献を通じた教育活動「人間活性化プロジェクト」の一つであり、学生が企画・制作するCATV番組『発見！駿大いるプロ情報局』の学生指導を担当した。今回は、その活動事例を詳細に紹介する。わずか半年ではあるが、映像制作の実践を通して、学生の社会性やコミュニケーション能力を発達させていく可能性を強く感じた。この活動を通じて今後、教育的価値について分析していく予定である。

**【キーワード】** デジタル映像、情報発信、実践教育、メディア・リテラシー教育

## 1. はじめに

デジタル機器、ソフトウェアが安価になり、一般市民による映像制作が増えてきた。

実際、ビデオカメラとパーソナルコンピュータ、映像編集ソフトがあれば誰でも映像作品を作れる時代になった。しかし、機材がそろったからといって、誰もが映像作品を作れるものではない。撮影した映像をただ単に編集したからといって作品になるものではない。カメラを回して映像を撮るという行為は、映像を記録するということであり、映像作品を制作するということとは異なる。映像を作品として成立させるためには、企画、撮影、構成、編集という一連の作業が必要であり、統一された1つのコンセプトに基づいて完成されなければならない。つまり、映像作品を制作するには、専門的スキルやノウハウ、豊かな創造性などが必要となる。

さて、今回の主題である学生の映像制作における教育的価値の研究に関して、東京キー局のディレクターとして多くのテレビ番組を制作してきた経験か

ら、メディア・リテラシー教育としての映像制作は、単に技術やスキルを身につけるだけでなく、学生の社会性やコミュニケーション能力を発達させる可能性を持っている、と考えている。

その具体例として、現在、駿河台大学が行っている「人間活性化プロジェクト」のひとつで、3年前から入間ケーブルテレビで放送されている番組『発見！駿大いるプロ情報局』の制作があげられる。その番組の継続的制作にあたり、学生が受動的視聴者から能動的発信者になることで新しい「教育的価値」を見いだすことができるのではないか。

『発見！駿大いるプロ情報局』（以後、いるプロ）の活動について詳細に報告するとともに、そこにおける意義や問題点について考察する。

## 2. これまでの経緯

### 2.1 地域密着型番組「発見！駿大いるプロ情報局」とは

学生たち自身が企画・撮影・取材・編集等の作業

を行って制作する番組『発見！駿大いるプロ情報局』（以後いるプロ）は、2006年4月より入間ケーブルテレビで放送を開始した。毎日午前9時30分と午後5時30分から放送の15分の地域密着型番組で現在、月に2本のペースで納品されている。今までに、「おとろろ祭り」や「アポポ商店街サマーフェスティバル」など入間のまちの地域イベントや人々の活動をはじめ、「初心者向けパソコン講座」や「豊岡フチ大学」など駿河台大学が地域に向けて行っている様々な活動を取り上げている。入間のまちの魅力を学生たちの視点から新鮮に映し出すことで、地域住民に対して有益な情報を発信したり、駿河台大学が地域に根ざした身近な存在であることなどを伝えている。

## 2.2 これまでの活動上の問題点

筆者が担当した以降の活動を報告する前に、これまでの活動上の問題点をいくつか挙げておきたい。

- ① 今までは、番組制作に強い関心を持った学生というよりは、トータルで24時間活動を行えば単位が取得できるという理由で参加する学生の方が多く、大抵、彼らは単位を取得した段階で、活動を辞めてしまうため、このスタイルで活動を続けていては、一向に番組制作のスキルが上がることはない。
- ② ノンプロフェッショナルである学生が15分番組を月に2本制作するのは無謀といえる。

おそらく全国的に見てもこのような活動を行っている大学はないのではないかと。しかも活動時間は、授業が終わる平日の夕方以降や週末に限定されるため、作業する時間の確保がとても困難な状況である。

以上の問題が解決されなければ、今後、番組のクオリティは上がらないと断言する。早急に解決すべき問題である。

## 3. 本年度の実践

### 3.1 「いるプロ」での番組制作の活動目標

「いるプロ」で活動するにあたり、以下の目標を定めた。

- ① ビデオカメラやパーソナルコンピュータなどのデジタル機器を自由自在に使いこなして映像作品を作るための技術やスキルを獲得させる。
- ② グループ制作における仲間との協調性を養い、また地域の人たちと積極的に関わることで社会性やコミュニケーション能力を獲得させる。
- ③ 映像作品の制作方法を学ぶことで、実際にテレビ放送されている番組の手法などを理解し、批判的視聴能力を養う。
- ④ 活動グループ全体としての映像制作の技術やスキルを高めていくために、継続的に活動する。また新たに入ってくる学生に対し、映像制作の基本的指導ができるような力を養う。

### 3.2 映像制作環境について

機材は、メディアセンターのビデオカメラを使用し、編集は、同じくメディアセンターと入間市の「駿大ふれあいハウス」のパーソナルコンピュータと映像編集ソフト（EDIUS）を使用する。EDIUSは、入間ケーブルテレビでも実際に使用されている編集ソフトで、制作上の互換性を持たせるためである。

### 3.3 本年度の実践

6月から「いるプロ」の学生指導の担当になり、どのように番組制作の体制を作っていたか、詳しく述べる。

#### ① まずは活動する学生集めを行う

2009年5月に前任者から指導担当の引き継ぎを行った時点で、今まで番組制作を行っていた学生4人全員が辞めてしまったため、学生集めから行わなければならない。「いるプロ」掲示板で募集を行ったところ、番組制作に興味を持った学生が3人（文化情報学部の2年生2人とメディア情報学部の

1年生1人)、さらにメディア情報学部の1年生で映像制作に興味を示していた2人に直接声をかけてスカウトした。以降、同様に学生集めを行い、結果、メンバーが35人になった(2009年9月末現在)。ただし、そのほとんどが映像制作について未経験者であった。

## ② 取材の基本を現場で教える

次に行ったことは、現場での撮影実習。土曜日に大学で行われている市民講座「ふるさと喜楽学」の取材。参加学生は6人。基本的なビデオカメラの操作方法を教えた後に、筆者とともに撮影をさせた。いきなりの実践である。300人近い参加者のいる会場で講義の妨げにならないよう気を配りながら、講義や参加者の様子を撮影。さらに講義終了後、今度は学生が見ている前で筆者が参加者に直接声をかけてインタビュー取材を行った。

続いて学生にもインタビュー取材を行うよう促したが、全員躊躇し、結局、インタビュー不成立。その理由は、

「人が多すぎて、一体誰に声をかけていいのかわからない」「お客さんが怖そう」「最初にどうやって声をかけていいのかわからない」「初対面でしかも年上の人に声をかける勇気がない」「声をかけても断られそう」「何をどのように質問していいのかわからない」「質問した後に相手の答えを聞きながら次の質問がどうして浮かぶのか？」など。取材終



写真1 いきなり「ふるさと喜楽学」を取材

了後、次々に学生から戸惑いや疑問の声があがった。しかし、学生の表情はみな活き活きとしていた。

## ③ 定期的にミーティングを開始

続いてメンバーを集めてミーティングの実施。学生の空いている時間を調整した結果、毎週水曜日の昼休みに研究室で定例ミーティングを行うことにした。午前中の授業が終わると同時に学生たちが研究室にやってくる。各自用意してきた昼食を食べながら、連絡事項や今後の予定を報告する。そして6月いよいよ新体制になって初めて番組を制作することになった。



写真2 研究室でお昼の定例ミーティング

## ④ 新体制で初の番組制作を開始

新体制になっての初めて制作するのは「通学合宿」についての取材番組。「通学合宿」とは、入間市内の小・中学生たちが親元を離れて、公民館で寝食を共にしながら学校に通う催しで集団生活を通じて規則正しい生活習慣を体験し、働くこと、協力し合うこと、感謝の心をもつことの大切さを知ることなどを目的としている。公民館の職員や駿河台大学をはじめとした大学生や地域のボランティアスタッフが一緒に泊まり、遊んだり、食事をしたり、勉強を教えたりするなどして子供たちをサポートする。毎年6月から7月にかけて入間市内の各地域で行われている。

撮影本番は、小・中学生32人が参加し、大学生や地域のボランティアスタッフやサポートスタッフを合わせると延べ80人以上になる通学合宿の中では最大規模の「西武地区通学合宿」(実施は7月6日～11日)を取材することになった。

7月1日、撮影に入る前に入間の「駿大ふれあいハウス」にて筆者が学生に対してVTRを見ながら映像制作講座を行った。学生の参加は10人。



写真3 「ふれあいハウス」で映像制作講座

番組を制作する際には通常、以下の作業を行う。

- ① 番組を企画する
- ② 詳細についてリサーチを行う
- ③ リサーチ結果をもとに「企画書」を作成する
- ④ 企画をプレゼンテーションする
- ⑤ 企画が通れば、ロケ台本を作成する
- ⑥ 「取材願い」の書類作成
- ⑦ 撮影スタッフを集める
- ⑧ 取材先に「取材願い」や「企画書」を送ってロケの調整を行う
- ⑨ 取材本番
- ⑩ 取材後、映像素材をパソコンに立ち上げる
- ⑬ 編集
- ⑭ 編集した映像を試写～編集直し
- ⑮ ナレーション原稿、テロップ原稿作成
- ⑯ ナレーション録音、音楽入れ、テロップ入れ
- ⑰ 完成試写～納品

番組制作の経験がない学生たちは、地道にこのようなフローを繰り返し行わなければならない。

そして今回の企画の狙いについて取材に先立ち話し合いを行った。ミーティングの結果、「5泊6日の集団生活を詳細に追いかけて、その中でボランティアスタッフとして参加する駿河台大学の学生と子供たちとの心の交流をそれぞれのインタビューを交えながら描く」ことに決定した。

そして、いよいよ撮影本番を迎えることになるのだが、実はそれ以前に筆者と学生たちは、別の地区の「通学合宿」を既に取材していた。最初に学生が見ている前で筆者がビデオカメラを持って取材をして、基礎的なことを教えた後、翌日、今度は学生だけで取材をしてもらった。そのとき、学生が子供たちへのインタビュー取材に熱が入り過ぎたため、このままでは合宿全体の進行の妨げになるという理由から合宿責任者から取材を停止するよう命じられた。結果的にこの取材がボツとなったため、7月6日から「西武地区合宿」を取材することとなった経緯がある。

取材した学生からは、「どのタイミングで声をかけて、どのくらい時間をかけてインタビューすればよいのか、その加減がよくわからない」「子供たちはチームごとに同時に別々で活動するのでどのチームを追いかけていいのか、迷ってしまう」「行事の進行の邪魔になるのでは、と撮影しながら心配になる」「ボランティアスタッフがたくさんいて誰に挨拶したらいいかわからない」「思っていた以上に撮影した映像が手ぶれで見づらい映像になってしまう」など実際に取材して初めて感じる疑問や質問がたくさん出た。カメラ操作も含めていろいろ疑問に感じたことをその都度、解決していかなければならない。

7月6日から「西武地区合宿」の取材。今回、あえて筆者は現場に行かずに「駿大ふれあいハウス」のスタッフに同行していただき、チーフの学生が中心になって学生自身で考えながら取材を行うことに

した。学生たちはスケジュールを調整しながら毎日交代で取材に行く。ビデオカメラは毎回2台使用して取材を行った。

○7月6日（合宿初日）参加学生3人 16時から21時まで取材

合宿スタート直後の子供たちと学生ボランティアスタッフの様子や夕食シーンを撮影、さらに子供たちへのインタビュー取材も行った。取材にあたった学生は、前回の経験を生かしてあまりインタビューに時間をかけ過ぎないように、心がけたそう。

○7月7日（合宿2日目）参加学生3人 16時から20時まで取材

子供たちが合宿に少し慣れた様子を撮影。

○7月10日（合宿5日目）参加学生3人 朝5時30分～8時と16時から21時まで取材

子供たちの起床、朝食の準備、朝食シーンからバスに乗って学校に向かう様子を撮影。さらに時間をあけて合宿最後の夜の子供たちの感想やキャンプファイヤーの様子などを撮影した。

○7月11日（合宿6日目）参加学生4人 9時から11時まで取材

閉会式の様子と合宿終了直後の子供たちや親の感想など取材

合宿が終わった後にインタビューを行った際、取材を通じて仲良くなった小学生の一人から「今度いつ会える？またぜひ会いたい」と言われ、うれしくて泣きそうになったと事後報告する学生がいた。



写真4 「通学合宿」でのインタビュー取材

インタビュー取材に対し、苦手意識を感じていた学生たちであったが、今回は学生だけで取材を行わなければならなかったため、必要に迫られて子供たちや学生ボランティア、そして地域ボランティアに積極的に声をかけて、インタビュー取材を行うことができた。このように実際にチャレンジしてそれを繰り返すことにより、そういう苦手意識が少しずつ薄れていくものだ。

今回の「西武地区通学合宿」のように80人を超える人が常に別々の場所で同時に何か行っているような状態では、事前に何を撮影するかを決めていたとしても、実際、現場に立つと、どこまで撮影すればよいのか判断に苦しむもの。結局取材時間は4日間合計で18時間30分、録画に使用したテープは60分テープで12本にもおよんだ。取材経験が全くない学生たちにとってテープをたくさん回してしまうのは当然である。撮影が終了したら今度は編集。撮影された映像素材約720分から編集して15分にまとめることになる。編集は「駿大ふれあいハウス」にて行った。

○7月15日 参加学生3人 映像素材の取り込み5時間

映像素材をパーソナルコンピュータに取り込む作業を行った。



写真5 編集の様子をチェック

○7月17日 参加学生6人 映像素材の取り込み8時間

○7月18日 参加学生3人 編集作業12時間

映像素材を取り込んだ後は編集。この期間、編集の方法を覚えるために日替わりでいろいろな学生が作業場を訪ねてきた。

○7月19日 参加学生4人 編集作業時間4時間30分

○7月20日 参加学生5人 編集作業12時間

○7月22日 参加学生5人 編集作業4時間30分

○7月24日 参加学生2人 編集作業7時間30分

筆者は可能な限り「駿大ふれあいハウス」を訪ねて作業の様子をチェックし、その都度気づいたことをアドバイスしていった。学生たちからは「短くまとめるためにどのシーンを使えばよいのか、またどのシーンを削ればよいのか判断に悩む」「シーンの順番をかえると全く違った印象になる」「シーンを入れ替えることでよりわかりやすくなる」「同じシーンでも使いどころを変えるとまた違った印象になる」「だんだん作業を進めていくうちにどこが面白いのかわからなくなってしまふ」など発見や疑問の声が次々と上がる。

○7月25日 参加学生5人 編集およびナレーション録り9時間

○7月26日 参加学生5人 編集作業7時間

新体制になって初めての作品がついに完成。取材

と編集を含めた作業時間は13日間合計80時間だった。

撮影から編集、最後の仕上げまで関わった学生からは「単純に手ぶれしている映像は編集で使いにくい」「何を見せたいのかわかるように撮影する際の画角を考えなければならない」「編集しているときにもっといろいろインタビューしておけばよかった」「もっといろいろ撮影したくなった」などの意見が出た。このような反省点を次回から確実に修正していくことこそが映像制作を学ぶ者にとって重要なことである。

#### 4. 成果

新体制になって1つ目の作品を完成させた後も、時間的に余裕のないスケジュールの中で、学生たち



写真7 作品「ダンスワークショップ」



写真6 作品「西武地区宿舎」



写真8 作品「アボボサマーフェスティバル」



写真9 入間市長にインタビュー



写真10 作品「入間川散歩」

が仲間や地域の人たちと協力しながら、番組を完成させている。

入間市の夏のイベントでは、入間市長にもインタビュー取材を行った。

## 5. おわりに

多くの学生たちは、初めて番組制作を経験し、撮影や編集を行うことで映像作品を作ることの面白さに気づき始めているようである。と同時に番組制作の難しさを実感しているであろう。そして今まではあまり知らなかった大学周辺の地域を取材することで地域への関心が高まっているようにも感じられる。また「いるプロ」での活動を一つのプロジェクト

と捉え、いかに発展させていくかを考え、それを実現すべく自主的にほかのメンバーに働きかけている意欲的な学生も出てきた。このような活動を通じて、わずか半年間ではあるが、学生の社会性やコミュニケーション能力は経験量と比例するかのごとく発達している様子が見て取れる。

今後の指導にあたり、「映像作品を通し、いかなるメッセージを訴えたいのかを明確にすること」「自分たちが制作した作品を、視聴者はどう感じて、どう受け止めるのかをもっと意識して番組を制作していくべき」という点を重視していこうと考えている。新体制になって2年目以降は、ぜひ学生たちが、主体的に行動を起こし、番組制作や後輩への指導を行い、さらに地域貢献として近隣地域の小学校、中学校、高校などで映像制作のワークショップを開催できればと期待している。

また、半年間学生を指導して感じたことであるが、2009年9月から最新のパーソナルコンピュータや映像関連のデジタル機材を取り揃えた「メディア工房」が稼働している。「いるプロ」では、メディアセンターで従来のビデオカメラを使用しているが、技術の進歩は歴然としており、撮影された映像のクオリティにかなりの差があることは否めない。可能であれば、メディアセンターの機材に関して今一度検討する必要があるのではと感じた。

今回は、「いるプロ」の活動報告のみとなっているが、次回は地域への関心度の変化や情報発信意欲の変化など「学生が本実践でどのような効果が現れてきたのか」分析してみたい。

## 6. 引用・参考文献

- 1) 松野良一、2005、「市民メディア論」、ナカニシヤ出版、p47-55
- 2) 塚本美恵子、2007、高校教育における実践的メディアリテラシー教育の試み：地域との連携を目指して 平成16年度～平成18年度 科学研究費補助金 研究成果報告書

**About educational value as the media literacy education of the program production that the university student does- Television program that is one of projects that develop Iruma region 「hakken! sundai irupuro jyouhoukyoku」**

**Report of activity -**

**By MAJIMA Sadayuki**

**[Abstract]** I examine this study about educational value of the picture production at a point of view as the media literacy education.

There is a practice study of the CATV program “Tama tankentai” (a May, 2004 broadcast start) where the student of the Chuo University Ryoichi Matsuno FLP journalism program seminar produces it as precedence example, and a citizen appears.

It is the one of the projects to activate Iruma area, and, as for me, a CATV program a student plans it, and to produce will perform the guidance of “hakken! irupuro jyouhoukyoku” this spring. I introduce the activity example in detail this time.

In only a half year, I strongly felt the possibility that social nature and the communicative competence of the student developed through practice of the picture production. I am going to analyze it about educational value through this activity in future.

**[Key Word]** A digital picture, Information dispatch, Practice education, Media literacy education